

三十階のスカイレストランの窓からは、都会の夜景が見えている。

目の前は、下町の工場が立ち並び、その向こうには川があり、橋が架かっていて、両側の街灯は左に行く程小さい光を放っている。川の幅は、まあまああるようだった。

美津子は、男と差し向かいでテーブルに座って、運ばれてきた料理とにらめっこしている。

べつに、その料理に恨みがある訳でも、気に入らない訳でもない。ただ、なんとなく食欲が湧かないのだった。

目の前の男は、美津子の学生時代の友人で、最近をよく会っている人物なので、緊張をしているということでもない。

「なんだか、食欲がないみたいだね」

男が、いつまでも食事に手をつけようとしないう美津子を見て、怪訝そうに声をかけた。

声をかけられて、「あ」と言っつて男の顔を見た。

男の顔は、少々くたびれてはいるが、そこそこ元気そうに血色が良い。年齢的には五十代後半といったところだろう。

「ちよつと、今日の演奏会は疲れちゃって…」

「ああそうだね、みーちゃんのパートは、結構多かったからね」

男は、美津子の機嫌をとるような口調で言ったが、そんなに疲れる程の演奏時間でもないだろうと、内心想った。

しかし、これは学生時代からの癖で、あからさまに二人の人間関係を反映していて、いまさらいかんともしがたいものなのだった。

「そんなに、長時間でもなかったわ」

美津子はそっけなく言い、男は、ははと小さく笑った。

「旦那さんの具合はどう？」

「別に、今どうということじゃないのよ」

美津子は答えた。

美津子の夫博文は、病気がちで、長年肺気腫を患っている。結婚した当初は元気で、ここ二十年程の間だ。

美津子と博文の間には、娘が一人いて、これはもう三十になるが、まだ独身で家に居る。

「もうそろそろ、一緒に暮らしてもいいんじゃないのかな」

男は、物憂げに眉間に皺をよせ、斜めから覗き込むように

美津子を見ている。

「私ももう歳なのよね」

美津子は、それには答えず、にらんでいた目の前の食事に手を付けはじめた。

男は溜め息をつき、上目遣いに天井を見つめた。

「だいたいあなたがいけないのよ。ぐうたらで、仕事もしないから」

「いや、僕は一流の演奏家になって、君を養っていいこうと思つてたんだ」

「一流の演奏家になるには、大きな国際コンクールで入賞するか、どこかの重鎮にコネがあるか、何か別のもので有名になるかしかないのよ。それが、なによ、いつも部屋でごろごろしてて、棚からぼたもちが落ちてくるとでも思ってたの？ お笑いだわ」

男は、言葉に詰まって、きまり悪そうに横を向いた。

「昔のはなしだよ」

美津子は溜め息をついた。

「そうね、変なことを思い出すようなことを、あなたが言う

からよ」

「ごめん、でも、一緒に暮らしたいというのは本当だよ」

「あなたがその気でも、私はそうはいかないの。私には病弱な夫がいるのよ。あなたは、奥さんがいないからいいけど」

男は、五年前に妻を亡くしていて、二人の間に子供はいなかった。

「僕は…、別れるつもりはなかったんだ」

男は、ぽつんと言った。

川向こうの道をたくさんの車が行き来している。大きな窓ガラスを通して、ヘッドライトの光がすれ違うのが見えていた。

「三十年前も、ここに来たよね」

「そうだったかしら？」

美津子は、首を捻った。

男は、辛そうに、目を細めた。

「君は、本当に僕のことを好きだったのかい？」

男が言い、

美津子は、男を見た。

「そう、好きだったわ。あなたの匂いは好きだったし、一緒に居ると落ち着けたわ」

男は、少しほっとした表情をした。

「でも、収入の無いあなたと一緒にいる訳にはいかなかったのよ」

男は、再び辛そうな顔をした。

「で、今の旦那と一緒にになった訳か…」

美津子は、むっとした。

「なにをえらそうに言ってるの」

「あ、いや、そんなつもりで言ったんじゃない…」

男は、気色ばんだ美津子を見て、慌てて首を横に振った。

「とにかく、あなたのせいで、私はなにも悪くないのよ」

「だいいち、どの面さげて、苦勞して私を音大まで行かせてくれた親に、あなたと一緒にになります、なんて言えると思う？」

男は、さらに困惑した様子で、口をもごもごさせて、黙り込んだ。

その当時、美津子は、とある銀行の契約社員として働いて

いた。大手の銀行なので、契約社員といえども収入は良い。音大を卒業後、就職し、今、目の前に居る西野惣一郎と、都内のマンションを借りて一緒に住んだ。

惣一郎は、音大の同級生で、いずれ留学してプロになるつもりだった。大学では、バイオリン専攻だった。

しかし、彼は、一向にうだつがあがらず、美津子は、仕事で知り合った森田博文と結婚したのだった。

夫である博文は、まるつきり風采はあがらないが、実直で都庁に努めていて、生活は安定していた。

一方、美津子は、すらつと背が高く、色白の美人で、誰彼となく声をかけてくる。つまり、引く手あまたというあんなの娘だった。

それが、どういう訳か、まったくぱつとしない博文に見染められ、付き合いを始めたのだった。

博文は、美津子が同棲をしていることは知っていたが、それでも、自分と付き合い合ってくれる美津子にプロポーズしたのだった。

博文には、あまり自信はなく、多分断られるだろうと思っ

ていたが、意外にも、美津子は博文のそれを受けたのだった。

家の中は真っ暗だった。玄関を開け、すぐ横の壁にあるスイッチを押すと、明かりがついた。

誰も居ないのか、と博文はつぶやいた。

いないことは分かっているのだが、それでも、口を衝いて出た自分の言葉に、思わず苦笑いした。

家の中は、4LDKで、都会のマンションとしてはわりと広い。

以前は、電車で二時間の郊外に、家を建てて住んでいたのだが、博文が病気になったので、勤め先である都庁に近いところに、マンションを買って移り住んだのだった。

家族は三人で、妻と娘が一緒に住んでいる。

妻は、専業主婦だが、時々、市民楽団でピアノ弾きのアルバイトをしていた。娘は、これはもう三十になろとしていたが、独身で、広告会社に勤めている。

博文はリビングの灯りをつけた。

誰も居ない部屋の空気が、寒々と感じられ、思わず彼は、

ひどく咳き込んだ。

しばらく咳き込んだ後に、ゼーゼーと肩で息をした。

どうも、最近では、調子がよろしくない。

階段の上り下りなんかをすると、すぐに息があがった。マンションには、エレベーターがあったので、それは、随分と助けられていた。

仕事は、事務仕事なので、とくに問題は起こらないのが救いだった。

暫くして、呼吸も落ち着いてきたので、博文は冷蔵庫の扉を開けて、中にある夕食を取り出した。それは、妻が、自分が出かける前に作って、冷蔵庫に置いてあったものだ。

彼の妻美津子は、そのあたりは手際が良い。

彼は、取り出したものを、電子レンジにかけ、温めた。

それも、いつもの習慣で、手慣れたものだ。

料理は、まあまあ美味しい。これが、作りたてだったらもつと美味しい筈だ。しかし、最近では、こういったパターンが常となっていた。

最近、美津子は留守がちで、しばらく、彼は妻と口を利い

ていないのだった。

それについて、彼はとくに不満は持っていなかったし、妻との生活がこのままいつまでも続くとも思えなかった。

それは、若いころからそうで、なにかしら、彼には自分に対して肯定的な気持ちになれない、といった癖があった。

食事は、いつも自分の部屋で食べた。その方が落ち着くし、そのまま寝転がれるし、酸素吸入なんかが必要な時に便利だからだ。

博文は、妻が作ってくれたものを食べながら、部屋に備えて付けてある書棚を見た。

書棚には、ぎつしりと本が詰め込まれていて、一部は、本の上の隙間にも本が差し込んであった。

もともと読書好きだった彼が、病気をして以来、あまり外に出ることができないので、なおさら本を読むようになったのだった。

したがって、本は溜まる一方で、かなりの本を捨てたり、古本屋に持っていったり、他人に譲ったりした。

一冊の本の背表紙が目に入った。

背表紙には、コチャバンバ行き、と書いてあった。

それは、彼がまだ若い頃、古本屋で買った本だった。結婚する前に買ったものだと思われた。

彼にとっては印象深い本で、いつまでも捨てずに置いてあるものだった。

遠い外国のある村で、乗客を乗せたバスが行方不明となつて、発見された時には、運転手も含め、全員が死亡していたが、なぜか皆、にこやかに笑って死んでいた。

主人公は、これはきつと、安楽死ができるなにかがあると思い込み、コチャバンバというその村を目指して行こうと画策する、といった具合の話だった。

彼は、くたびれたその本の背表紙を見て、にやりと笑った。いつも、書棚に目を遣る時、目に留まるものだったが、一度も手に取ったことはない。長年、そこにそうやって置いてある。何十年も前に読んだものなので、彼の記憶の中では、かなり違ったものになっているかもしれなかった。

部屋の外で大きな物音がして、彼は目を覚ました。

どうやら眠り込んでいたらしい。

彼は、ソファアールから立ちあがると、部屋の外へ出た。

廊下に出てみると、玄関に誰かが倒れているのが見えた。
娘の友美だった。

玄関先の手彫りの熊の置物が、その辺にころがっている。
どうやら、物音は、それが置いてあった台から落ちた音だったようだ。

一段低い玄関から、廊下に倒れ込むようにうつ伏せになっている娘に近づいて、彼は、背中を軽く叩いて声をかけた。
しかし、答はない。あきらかに酔っぱらっている体で、軽く
躰こびきすらかいている。

やれやれ、と彼はつぶやき、娘の体を抱き起そうとした。
が、その体は意外と重たく、彼は仕方なく、廊下を引きずるようにしてリビングまで連れて行った。

随分と体力がなくなつたと、今更のように思った。
娘をリビングのカーペットの上に寝かせて、毛布を掛けて
やった。

彼は、再びゼーゼーと息があがってしまった。

娘の友美は、年が明けると三十歳になる。独身である。

今時、三十で独身はめずらしくないかもしれないが、それでも、出産を考えると、それほどんきに構えていられる歳でもない。

出産、出産とうるさく言わないでよ、女は子供を産む道具じゃないのよ。という、世の風潮を男性諸氏は、本当だと信じているふしがあるが、とんでもないはなしで、女性はそれほど馬鹿ではない。その件に関しては、子供の頃からかなりシビアで、自分の限界を知っているのが現状で、うかつに信じ込んではいけないはなしなのである。

「あ、いけない」

寝ていた筈の友美が、突然言っていると、起き上がって辺りをきよろきよろと見回した。そして、立ち上がろうとした時に、博文の顔を見て、ああ、という気の抜けた声を発して再び横になろうとした。

「今、何時」

友美が訊いた。

「十二時だよ」

博文が答えると、友美はリビングの壁掛け時計を見た。

時計の針は、確かに午前十二時を少し回っていた。

デジタル表示ではなく、秒針の付いた文字盤が見えた。これは、電波時計でもない。博文に言わせると、どれもこれも同じ時刻を指している時計なんて、味気がないということらしい。

「お母さんは？」

友美が言った。

「まだ帰ってないよ」

博文は答えた。

「今日は、演奏会だったっけ」

母親の美津子は、演奏会の日は、遅くまで帰らないか、楽団の友人の家に泊まって帰るのが、最近の常だった。

しかし、それについて家族はあまり関心を示さない、という具合だった。

博文は、来年定年になるし、娘は娘で、じぶんのもので忙しく、人のことにかまってられない、ということだった。

娘の友美は、もともと、やや自意識過剰なところがあつて、自分の事以外はあまり関心がないタイプだったが、かといっ

て、そんなに見かけが美しい訳ではない。

どちらかというと、あまり可愛くはないほうだった。どうやら、父親に似てしまったようだ。

「寝てたの？」

友美が言った。

「ちよつと、うとうとしてたかな」

「起こしちやつたみたいね」

友美は、気の毒そうに言った。

「玄関に倒れてたもんでね」

「えっ、そうなの？」

どうやら、倒れていた自分を博文が運んでくれたらしい。父親にとって、それがどんなに大変な作業かは、友美にしてみてもじゅうぶん分かっていることだった。

友美は、申し訳なさそうに眉を八の字に寄せた。

「大丈夫だった？」

「平気とはいえんが、特に問題はないよ」

友美は、ほつとした。

「病院は行ってる？」

「いつも通りさ、特に変わったことはない」

「もう長いよね。私が小学生の時からかな」

「そうだな、もうちよつと後だったらよかったのにな」

「もうちよつと？」

「もうちよつとの間元気だったら、もうちよつとお前と遊んでやれたらろう？」

博文は、残念そうな顔をした。

友美にしてみれば、父親は、仕事から帰ってくると、いつも自分の部屋で本を読んでいる姿しか憶えていない。友美が、思春期の間は、とくにその印象が強かった。

その父親から出た言葉に、少し戸惑いを感じながら、そうなのかと思った。

父親のその姿は、彼の本意ではなかったのだろうか。

「今度、家族旅行でもしないか」

博文は言った。

「どうだ？」

返事をしない娘に、父親は問いかけた。

「家族旅行って、二人で？」

「いや、お母さんも一緒だ」

「お母さん、行ってくれるかな」

「もちろん、大丈夫だ」

彼は、言いきった。

博文は、自分の妻が、この申し出を断らないだろうということはわかっていた。決して仲が好いとはいえない夫婦であっても、そこは長年共に暮らしてきた二人だった。

「何処へ行くの」

「そうだな、どこかの温泉地がいいな。のんびりできるぞ」

「草津温泉あたりかな。小学校の時、課外学習で行ったよね」

「それについては、俺にまかせてくれ」

「そうね…」

「どうですか、最近」

博文が入って来るなり、医師は聞いた。

「そうですね、あまり良いとは言えませんね」

椅子に腰を下ろしながら、彼は答えた。

「そうですか」

長年、繰り返された会話だが、最近は特にあまり良くないと、彼は感じていた。

「まあ、この病気はやっかいな病気ですから、気長につきあつていくしかありませんからね」

医師の口からは、いつも通りの答が返ってきた。

もう、長いことこの病院に通っている。

都内にある大病院だが、実績をあげるために、やたらになんでもかんでも手術をしたがる病院で、おまけに、検査のデーターなんかも怪しげだと噂される、評判の悪い病院だったが、終末期ケアはわりと良いという話だったので、彼はこの病院を選んだのだった。

担当の岡原医師は、まだ若く三十代前半で、体格は立派だが、いまひとつ頼りない感じで、いつも上司の顔色を伺っている。といったあんばいで、院内では、いつも素足にサンダル履きという格好だった。

「とくに変わったことはありませんか」

岡原医師は聞いた。

「最近、よく息切れすることが多くなりました」

岡原医師は、そうですかと言って、聴診器をあてた。

胸の辺りから背中へと丹念にあてた後に、パソコンのモニター画面を暫くにらんでいたが、やがて、博文に向きなおると言った。

「とくべつ変わったこともなさそうですがね。数値的にも落ち着いてるし」

「そうですか」

そう言ったあとに、彼は、岡原医師に向かって言った。

「ちよつと、先生にご相談があるのですが」

「何でしょう」

岡原医師は、やや怪訝そうに彼を見た。

「今度、旅行に行きたいのですが、大丈夫でしょうか」

「何処へ行かれますか？」

「どこかの温泉にでも、と思っているんですが」

「遠方ですか」

「いや、比較的近場でと、思っています」

「とくに問題はないでしょう」

岡原医師は答え、その後博文が診察室を出る前に、

「あ、携帯用の酸素吸入器は、持って行ってくださいね」と言ったのだった。

秋の行楽シーズンとあって、温泉地は何処も込み合っている。

急に決めた旅行なので、おおよそ何処のホテル、旅館は、予約で一杯で空いていない。さんざん苦勞して、やっと一軒のホテルが予約できた。

わりと、老舗のホテルで、そこを予約できたのはラッキーだと言えた。

旅行は、自家用車で、愛車のブルーバードだ。二十年以上前の型で、博文が気に入ってその頃買ったものだった。

運転は博文で、疲れたら美津子が代わることにしていた。都心から二時間ほどの行程なので、それほど心配はしていない。出発して、辺りの風景を見ている間に着いた。

ホテルに着いて、入口で車を預け、中に入ると、広いロビーがあつてさすがに老舗といった風格で、宿泊客達が、ソファーに腰を下ろしてくつろいでいるのが目に入った。

博文達は、チエックインを済まそうとフロントまで行った。フロントマンは愛想よく対応し、目下のパソコンを覗き込んだ。その間、友美は、ホテル内のあちこちを見回したりしていた。仕事の種でもさがしているのだろうか。

愛想のよいフロントマンは、パソコンの前であれこれと操作をしていたが、ちよと困ったような表情をした。

彼は、パソコンから顔を上げると、博文達を見て言った。

「お客様、大変申し訳ありませんが、お客様のご予約が確認できません」

博文は、えつと言つてフロントマンを見て、さらに妻を見た。ホテルの予約は、美津子が行ったものだったのだ。

「予約が確認できないって、どういうこと」

美津子が、強い口調で言った。

瞬時に語気が強まるのは、瞬間湯沸かし器と言われるほどの性格ではある。

美津子の言葉に気圧けおされて、愛想の良いフロントマンは、ますます困った顔をした。もともと、彼の顔は、よく見ると困った時の顔よろしく、眉が額の中央で、八の字に上がって

いて、それがさらに強調されて、さも困ったといった顔に見えた。

「そうおっしゃられましても…。ネットでのご予約ですので、何かのお手違いではないかと」

「なんですって、するとあなたは私の一方的なミスだとおっしゃるの」

「いえ、当方とのマッチングの問題かと…」

フロントマンは言った。

「うまいこと逃げたわね。まあいいわ、じゃあ、他の部屋はあるの」

美津子は、瞬間湯沸かし器でもあるのだが、それだけに冷静に戻るのも早い。

「それが…、あいにく本日は満室でございます…」

彼は、申し訳なさそうな顔をした。

「じゃあ、私達に野宿しろとおっしゃるの」

再び、美津子は強い口調で言った。

「いえ、それは」

彼は、言葉に詰まると、腕組みをして考え込んだ。

そして、再びパソコンを覗き込んで、暫くあれこれ覗き込んでいたが、急に表情があかるくなり、

「ああ、ありました、お部屋が一つ、別館の方に」

そういうと、彼はにこやかに顔をあげて美津子を見たのだった。

「別館？まあ、それでもいいわ」

美津子もほっとした様子で、やわらかい口調で言った。

「ありがとうございます。それでは、別館の方へご案内いたしますので、暫くロビーでお待ちいただけますか」

フロントマンは言い、三人はロビーの椅子に座って待った。やがて、迎えのマイクロバスがやって来て、三人はバスに乗り込んで別館に向った。

バスの乗客は彼ら三人だけで、他は運転手一人だった。いつの間にか日が暮れていて、辺りは真っ暗になっていた。バスの窓の外の風景は、暗闇に閉ざれて、皆目見えなかった。ということとは、街灯もなく、けっこのような田舎道を走っているものと思われた。

別館は、離れたところにあるらしく、三十分ほど走って、

やっと着いた。

別館と呼ばれる建物は、木造で古びていて、入口の照明も薄暗く、いつの時代に建てられたものか、よくわからなかった。

辺りを見回すと、森が鬱蒼と繁っていて、水の流れる音が聞こえていた。建物の裏には川があるのだろう。

三人は玄関から中へ入った。

中へ入ると少し広い空間があつて、すぐ向こうに受付フロントがあつた。中はまあまあ明るく、外観の印象とはちがつて、きちつと掃除が行き届いていて、清潔な感じがした。

フロントには、痩せ形で縁無しの眼鏡をかけた、若そうな男が立っていて、こちら向きに自分の手元をのぞきこんでいた。

男は、三人が近づいて行くと、顔を上げて頭を下げた。

こちらは、あまり愛想がよさそうではない。

「いらっしやいませ、森田様ですね」

男は、そう言うと、受付表とボールペンを目の前のカウンターに差し出した。

それに美津子が書き込んでいる間、博文はカウンターの奥の時計を見ていた。時刻は、午後七時になろうとしていた。美津子は、フロントの男が、愛想良かろうが悪かろうが気にする様子もなくペンを走らせている。

友美は、フロントの男の顔をじっと覗き込んでいた。

美津子は、書き終わると受付表をフロントの男に渡した。

男は、それを受け取ると、代わりに美津子に部屋の鍵を渡し、部屋の場所を説明した。

三人が、荷物を持って部屋に向おうとした時、友美がフロントの男に声をかけた。

「有本君じゃない？」

有本と呼ばれた男は、顔を上げて友美を見た。

一瞬間があつて、男はあつといった顔をした。

「森田か」

「久しぶりね」

友美が、うれしそうに笑った。

「高校の時以来ね」

「そうだな、旅行？まあ、うちに来る人はみんな大抵旅行だ

けど」

有本は、少しうちとけた様子で言った。

「私のこと、憶えててくれた？」

「そりゃあ、クラスいちの秀才だからな」

友美はうれしそうな顔をした。

博文と美津子は、友美が話しこんでいるのを、振り返って見ていたが、やがて、友美がそれに気づいて、二人のところへ戻って来た。

「だれ？」

美津子は聞いた。

「高校の時の同級生」

友美が答えた。

別館の建物は、妙に内部が複雑に入り組んでいて、上へ上がったかと思えば次には下へ降りたり、渡り廊下を通って、やっと部屋に着いた。

部屋は十六畳ほどの和室で、障子の外に縁側があつて、わりと広い。

縁側の外は、真っ暗で見えないが、どうやら、川にせり出

しているようだった。

部屋に着くとすぐに、中居が現れた。

中居は、年配の女性で、お食事を用意しますので、お風呂へでもお入りになって、と彼女は言った。

美津子と友美は、連れ立って、別館の大浴場へ向かった。

「あなたは？」と、美津子が聞いたので、汗だけ流してくると言って、博文も出て行ったのだった。

別館の廊下は、大勢の泊まり客がいるにしては静かで、浴場にしても、数人の客がいるだけで、閑散として見えた。

博文は、一足先に部屋に戻り、美津子と友美が戻る頃には、食事が部屋に運ばれてきていた。

夕食は、けっこうな品揃えで、さすがに老舗のホテルと思わせるような出来栄だった。

三人は、それぞれ、美津子は好きな日本酒で、友美は焼酎でと、食事を楽しんだ。どちらも飲んべえなので、お酒にはなにかとうるさい。

博文は、もともとあまり飲めない上に、最近では医者から止

められているので飲まない。

美津子は、日本酒は辛口好みで、贅沢を言えば、辛口でありなおかつ甘口で芳醇なのが良いそうだが、そんなものが本当にあるのかといえは疑わしい。しかし、以前にそんな酒に出会ったことがあるそうで、しかしながら、次にそれをもとめた時には、すでに味が変わっていたそうだ。つまり、それは地方の小さな造り酒屋で造られたもので、ブレンドされたものではなく、その樽に限ったものだったようだ。

友美は、焼酎派だが、それも芋焼酎がいいそうで、奥が深いのだそうだ。

「三人で旅行に来たなんて、何年振りかしら」

美津子が言った。

「友美が小さい頃だから、二十年以上前だろう」

博文が答えた。

「二年生の時じゃないかな」

友美が言い、

「そうだったかしら」

と、美津子が答えた。

まるで、絵に描いたような一家団欒の風景だが、三人にとっては、遠い昔にあったような、と思わせるもののような気がした。

しかし、それは意外と違和感はなく、心地よいものだった。

「さつき居た有本君ね」

友美が言った。

「ああ、あのフロントのひと？」

美津子が、少し赤くなつた顔で行つた。

もうかなり飲んでいるはずなのだが、さほど酔つた様子はない。

「高校の時の同級生なのよね」

「それは、さつき聞いたわ」

「同じクラスだったのよね」

「そう」

友美は、めずらしくにこにこしている。

「好きだったの？」

「けっこうカッコよかったのよ」

「そうでしょうね、そう思うわ」

「告白したの？」

「できないわよ。私、こんなんだもの」

友美は、慌てて、手を横に振った。

だが、酔っているせいもあって暗さはない。

そんな会話を、博文は黙って聞いている。娘のそんな話も、なんとなく暖かく博文の心に入り込んできていた。

「よし、告白しちゃおう」

友美は急に立ち上がった。

「えっ、今から？」

美津子は驚いて、立ち上がった友美を見た。

「夜、会おうって、約束してあるのよ」

「なんだ、そういうことか」

そう言うと、友美はおぼつかない足取りで部屋を出て行った。
た。

美津子は、あきれ顔で、友美が出て行った入口を少しの間見ていた。

「いいの、あれで」

「何がだい？」

「心配じゃないの」

「もう、いい歳なんだから、それでいいんじゃないのか」

「それより、あんなに酔っぱらって、相手に失礼じゃないのかな」

「意外と冷静なのね」

「僕は、いつだって冷静だよ」

「そうね、興奮すると、体に悪いものね」

美津子は、溜め息まじりに、夫の顔を見た。

「そういう、齒に衣着せないところは、君は変わらないな」

「友美、うまくやるかしら」

「あまり、期待しない方がいいよ」

博文は、言った。

二人は、しばらく黙々と料理に箸を走らせた。

「前から聞きたかったんだけど」

博文が言った。

「なに？」

「君は、どうして僕と結婚したんだい？」

美津子は、怪訝そうに夫を見た。

少し間があつて、

「落ち着きたかつたのよ」と言った。

「落ち着いて生活したかつたのよ」

「彼が嫌いになつたから？」

博文は、思い切つて聞いた。

美津子は表情を変えなかつた。

そのかわりに「いえ」と、小さく言った。

博文は、それ以上聞くことはできなかつた。その理由を聞くのは怖かつたし、今更、いや、今でなくても聞く意味は無いと知っていた。

「私には、妹がいるのよ」

博文は、驚いて美津子を見た。

博文には、そんな話は聞かされていなかった。

「二つ下の妹がいてね」

美津子は、話を続けた。

「妹は、統合失調症でね、今も実家で、入退院を繰り返しているわ」

「知らなかつたな」

博文は答えたが、美津子の耳には入っていない様子だった。「今は、統合失調症なんていい名前がついているけど、精神分裂病ね」

「妹が中学校の時に、そうなったのよ。成績のとても良い子でね、周りもみんな期待したの、それが、重荷だったのかも
しれないわ」

「そうなってからは学校も行かず、家でふさぎこんだり、突然暴れだしたり、まるで、地獄だったわ」

美津子は、表情を変えない。美津子は、短気で、表情豊かな女性だが、時折、ろう人形のようにその表情が消えるのを、博文は知っていた。

「私は、とにかく、妹から逃げ出したかったのよ。静かなところで、落ち着いてピアノを弾きたかったの。そうやって、東京の音大に来たの」

「音大の間は、あいだ楽しかったわ。朝起きると、学校のレッスン室で、一日中ピアノを弾くの。もちろん、授業には出るけど。それ以外はずっと、ピアノを弾くのよ」

美津子が、めずらしく笑った。

「でも、ある時、思ったの。あの妹はこどうしているだろうって。私が、こんなに楽しんでいる時、あの妹はどうしているだろうって、あの妹は、ずっとこのままなんだろうかって、あの妹は、一生このまま日陰で生きるんだろうかって」

「そう思うと、悲しかったのよ」

「でも、私は、卒業しても家には戻らなかったわ」

博文は、黙って妻の話を聞いていた。

博文は、初めて自分の妻を知ったような気がしていた。と同時に、今まで知らなかったことを恥じてもいた。

「君が、人に厳しいのは、そのせいかな」

博文が、つぶやくように言った。

「厳しいかしら？」

「自分に厳しいから、人にも厳しいんだろ？」

「厳しくはないと思うわ。きついとは思いますが」

「彼は、このことは知ってるの」

「知ってるわ」

「そう」

博文は、少し寂しそうな顔をした。

「あなたは？」

美津子が、言った。

えっ、と博文は言った後に、ああ、と美津子の顔を見た。

「僕は、べつに、知ってる通りさ。君が好きだったから、結婚を申し込んだんだ。もつとも、承知してくれるとは、思っ
ていなかったけどね」

「それでよかったの？」

「しかたがないだろう。僕には取り柄がなかったんだから」

「友美には、僕の取り柄のないところを受け継がせてしまっ
て、すまないと思ってるよ」

博文は、当たり前障りのない答えを妻に話した。

妻の、真摯な態度に応えるには、不誠実だと感じながらも、

博文は、それ以上言わなかった。

美津子は、黙って聞いていた。

「僕が死んだら、君はまた彼と暮らすのかい？」

博文の口から、なにげなく衝いてでた言葉だった。

美津子の顔がこわばったのがわかった。

博文は、自分の発した言葉に戸惑った。

「あ、ごめん、僕はなにを言ってるんだろう」

あわてて否定をした。

そして、

「昔、僕が読んでた本を、君に勧めたのをおぼえているかい」

博文は、話題を変えた。

「何の本？」^{なん}

「コチャバンバ行き、という本だけど読んでくれたかなあ」

「ああ、その本は読んだわ。あなたは、いろいろ勧めてくれたけど、もともと私は読書好きでもなかったけど、その本は読んだわ」

博文は、嬉しそうに笑った。

「僕は、コチャバンバへ行こうと思ってるんだ」

美津子は、博文の顔をその大きな目で見つめた。

暫く間があつて、

「悪いの」と聞いた。

「多分ね。医者は何でもないっていうけど、僕の体は、僕がいちばんよく知ってるよ」

美津子は、なにも答えなかった。

博文は、そんな美津子に、初めて素直に好感を感じた。これまで、なんとなく遠慮がちに接していたものが、急に身近なものに思われた。

「コチャバンバは、どこにあるの」

美津子は、聞いた。

「さあ、僕にもわからないよ。だから探しに行くんだよ」

「ひよつとしたら、ここかもしれないな」

博文は、そう言うと、縁側の窓の外を見遣った。

窓の外は、真つ暗で、一面黒い絵の具で塗りつぶしたように見えた。

美津子には、夫の言葉が何を意味するのか、なんとなく感じることはできたが、それ以上のことは解らなかった。

「見つかるといいわね」

美津子は言った。

「いいのかい？」

「あなたを止める権利は、私にはないわ」

美津子は、小さく笑った。

翌朝は、晴れていたもので、その辺りを散策することにした。朝になってみると、その別館の周りには、わりと広々としていて、川沿いに雑木林が広がり、紅葉が見頃だった。

博文、美津子、友美の三人は、連れ立って雑木林の中を歩いていった。

ホテルの泊まり客らしい人達が、数組、同じように林の中を歩いているのが見受けられた。

夜、閑散とした別館の中では気づかなかつたが、けっこうな泊まり客がいるらしかった。

本館のフロントで、四苦八苦してやっと見つかった部屋なので、当然と言えば当然なのだが。

「昨夜は遅かったの」

美津子が、友美に聞いた。

「十一時くらいかな、帰ったら二人とも寝てるんだから」

博文は、疲れて果てて寝ていたし、美津子は、生来、一度寝込むと目を覚まさないといった体質なので、当然、友美が部屋に戻って来たことには、二人とも気づいていなかった。

「どうだった？」

「どうって?」

「告白するって、言ってたじゃない」

「告白?」

友美は、首をひねった。

「いやだわ、おぼえてないの」

美津子は、あきれ顔で娘を見た。

「そんなこと言ったの」

友美は、目頭を押さえた。まだ昨夜の酒が残っているらしかった。林の中は、朝のひんやりとした空気に包まれている。

「ということは、告白したのよね、多分」

友美は言った。

「あきれた。大事なことじゃないの」

「でも、大丈夫、次の約束もしてあるから」

友美は、あっけらかんとして答えた。

「それより、有本君で、まだ独身なんだって」

「よかったじゃない。でも、そんなことはすっかり憶えてるのね」

三人は、そんな会話をしているうちに、別館の玄関まで戻

って来た。

フロントには、昨夜から引き続き有本がいた。

散歩から帰って来た三人を、フロントで有本が迎えた。友美が手を振ると、有本も小さく手を振って応えた。

「いい感じじゃないか」

博文が、友美に言い、友美はうれしそうに父親を見た。

旅行から帰ると、すぐに、博文は職場を早期退職した。

職場を退職してしまうと、家に居るか、病院に行くかという生活になってくる。

かねてよりのコチャバンバ捜しは、頓挫しているかのようだったが、そのうち、あれこれと、荷物をまとめて準備らしきものを始めたのだった。

どこへ行こうとしているのかは、美津子にはわからなかった。

やがて、博文は、目星をつけると、荷物をまとめ出かけて行った。車で行ったり、時には列車で出かけたしたりした。

しかし、大抵、一日か二日で、疲れ果てて帰って来た。

「よくありませんな」

岡原医師は、眉間に皺を寄せて、博文に言った。

「あまり、無理すると、よくありませんよ」

「そうですか、でも先生、私にはやることがあるんです」

「何をなさってるのか知りませんが、あまり無茶をすると、命取りですよ」

岡原医師は、困ったように言った。

その後も、博文は、熱心に出かけて行ったが、コチャバンバはいつこうに見つからず、とうとう旅先で倒れて、病院へ担ぎ込まれてしまい、結局、その病院から、かかりつけの病院に移されたのだった。

美津子は、病院に駆けつけると、夫に付き添った。

博文は、人工呼吸器につながれたままで、美津子は、それを見守ることしかできなかつた。

そのうちに、博文はやや回復した。

美津子は、博文の枕元で話しかけた。

「どう、気分は」

「いいよ、とても」

「無茶するからよ」

博文は、力なく笑った。

「コチャバンバは、とうとう見つからなかったわね」

美津子が言うと、博文は、「いや」と返事をした。

美津子は、不思議そうな顔をした。

「僕のコチャバンバは、ここだよ」

かすれる声で、博文は言った。

それから五日後に博文は亡くなった。

博文の両親はもうとうに亡くなっていて、葬儀は、美津子達ごく一部の身内だけで行われた。

父親が亡くなって、友美はひどく悲しんでいたが、美津子はそんな素振りは見せなかった。もともと、仲の好い夫婦とは言えなかったもので、それほどでもないのかもしれないが、彼女が、彼女のなかで、感情の整理がつかないのかもしれないなかった。

三十階のレストランで、相変わらず美津子は、食事とにらめっこしていた。

西野惣一郎は、そんな美津子を恨めしそうに見ていた。西野にしても、そんなむつかしい顔をされては、食事も美味くなくなるといふもので、どこが良いのだこんな女、などという悪口が聞こえてきそうだ。

博文が亡くなってから、一年が経とうとしていた。

美津子は、相変わらず、楽団でピアノを弾いている。惣一郎とは、これも相変わらずの付き合いで、とくべつ変わったこともなかった。

「今日の君の演奏は良かったんじゃないかな」

西野が言った。

若いころは、演奏会が終わると、あれこれ批評しあうといふのがお決まりだったが、最近は、そんな話もしたことがなかった。

「なにをいまさら言ってるの、演奏家が歳をとって、良い演奏ができるわけじゃない。筋肉は衰えるし、感性も鈍くなるし、あとは口でごまかすしかないのよ。お年寄りの重鎮

達がよくやってるでしょう」

美津子は言った。本人は普通に言っているのだが、言われる方にはかなりきつい。

西野はむっとした。

「そう言う意味じゃないよ、それなりにつてことだよ」
めずらしく西野が反論した。

美津子は、ため息をついた。

「そうね、それなりに良い演奏しなくちゃね」

美津子は、ようやく食事に手を付け始めた。

博文がなくなってからは、西野との食事でも、美津子は酒を飲むようになっていた。なにかが起こつて、あわてて帰らなければならなくなることもなかった。

「もうそろそろいいんじゃないかな」

西野が言った。

西野の言わんとしていることは、当然、美津子にはわかっていた。

美津子は、食事をしながら、あれこれと考えていた。

「結局、私は、彼を愛していなかったのね」

美津子は、言った。

西野は美津子を見て、そんなことは知ってることだと思っ
た。

「そうだろう。僕はいつも君からそう聞かされてるよ」

西野は言った。

「でも、彼も私を愛していなかったのよ」

西野は、まじまじと美津子の顔を見た。

「そんなことはないんじゃないかな。君はとても素敵だった
し、才能があって、誰もが君を求めたじゃないか」

美津子は、黙って、窓越しに外の景色を見た。車の光の列
が、相変わらず、川向こうの道路を走っていた。

「彼には、選択肢がなかったのよ」

「よくわからないな」

「彼を、振り向いたのは、私だけなのよ」

西野は、黙った。

二人の間に暫く沈黙があつた。

ようやく、西野が口を開いた。

「君の、言いたいことはわかった」

「僕達と一緒に暮らそう。昔のように」

西野は、思い切って言った。

「それはできないわ」

西野は、辛そうに目を細めた。

「どうして？僕は随分待った。気の遠くなるぐらい待った。なのに、君は」

西野は強い口調で言った。西野の、強く握ったこぶしが震えていた。

「それはできないわ」

美津子は、伏し目がちに、もう一度小さく言った。

再び、二人の間に長い沈黙があった。今度は、出口の見えるいそれのような気がした。

「コチャバンバって知ってる？」

美津子が口を開いた。

「なんだいそれ」

西野は、ぶっきらぼうに答えた。

「安楽死よ」

「そんなものがあるのか」

「ものじゃないわ、場所よ」

「森田は、それを探してたわ」

西野は、ちらっと、美津子を見た。

「それで、見つかったのか？」

「みたいね」

西野は、今度は、横目で美津子を見た。

「どこに？」

「わからないわ、私には。でも、見つかったみたいね」

「それが、君と何の関係があるんだい」

美津子は、微かに笑ったように見えた。

「私も、コチャバンバを探そうと思うの。もちろん、私のね」

美津子は、立ち上がって、出て行こうとした。

「何のためにだい？」

西野は、恨めしそうに言った。

美津子は、振り向いて西野に言った。

「もちろん、楽に死ぬ為よ」

美津子は、笑った。